

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：37105

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K22003

研究課題名（和文）伝統か革新か：啓蒙期からロマン派に至る近代アフォリズムのメディア文化史的再構築

研究課題名（英文）Tradition or Innovation. A media-cultural study of modern aphorism from the Enlightenment to Romanticism in Germany

研究代表者

二藤 拓人 (NITO, Takuto)

西南学院大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：00878324

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：啓蒙期からロマン派に至る作家（レッシング、A・フンボルト、F・シュレーゲル、ヘルダーリン他）の手稿を調査した。そこで頻繁にみられる、広い余白をもつ「二段構成型ノート」が、18世紀の学者階層に典型的な「文化技術」であったという仮説を立て、このノート紙面の余白への書き込みと、アフォリズム産出との密接な関連を例証する成果を出した。

個別に焦点を当てたロマン派シュレーゲルのノートの場合は、欄外余白での注釈・批判が顕著であった。彼のアフォリズム的な筆記は、こうした古典文献学の伝統的な書記実践に基づくが、その一方で、そこから逸脱するような革新的なアフォリズム産出の局面も明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、近代アフォリズムを文化研究の枠組みから総合的に捉え直すことで、新たな研究領域開拓の可能性を探るものであった。具体的には、Siegert (2013) の「文化技術」論を基軸に、アフォリズム的なものが成立するメディア的・文化的条件を問い直した。とりわけ国内シンポジウムや国際学会、国際論集において、アフォリズムのテーマ圏に「書記」の文化、更にはその細部をなすノートの構成あるいは遺稿の「編集」の歴史という側面から新たに光を当てたことは、本研究の学術的意義を示す成果といえる。

また、本研究の社会的貢献の面に関して、筑波大学主催の招待講演会にて研究成果のアウトリーチ活動の機会にも恵まれた。

研究成果の概要（英文）： In this study, I examined the manuscripts of German authors from the Enlightenment to Romanticism (Lessing, A. v. Humboldt, Fr. Schlegel, Hoelderlin, etc.). I hypothesized that the notes with wide-margins for annotation seen frequently in these manuscripts represent a typical “cultural technique” (Siegert: 2013) of the scholarly class in the 18th century and generated research results illustrating the close relationship between notes written in the margins and the creation of aphorisms.

The notes and critical comments in the margins of manuscripts by the Early Romantic Fr. Schlegel are especially striking. I was also able to elucidate that, although his aphoristic notes are based on such “traditional” practices of classic philology, they also produced “innovative” aphorisms.

研究分野：ドイツ文学・メディア文化

キーワード：アフォリズム 断片・断章 ドイツ・ロマン主義 シュレーゲル 手稿・草稿 文化技術論 メディア論 編集文献学

1. 研究開始当初の背景

ドイツ・ロマン派のシュレーゲルやノヴァーリス、思想家のショーペンハウアーやニーチェ、ベンヤミン、あるいはフランスにおけるヴァレリー、バタイユ、J-L・ナンシーなど、近現代における「アフォリズム」の書き手といえば、それが文学的な創作であれ時代批判的・哲学的な思索であれ、学問制度の外側に属する例外的な作家が、自らの卓越した哲学思考に基づき選択した一表現形式とみなされる傾向にあるだろう。これに対して本研究は、「アフォリズムを一部の革新的な作家のみに許される特権的な表現形式と解すべきか？むしろ作家個人の哲学思考そのものが、アフォリズム的なものを書く、という具体的作業によってはじめて生じえたとはいえないだろうか？」といった問いを出発点にして研究計画を構想した。

翻ってアフォリズムの受容・発展・作用の歴史を辿ると、17世紀フランスのモラリストによるマクシム、更にはソクラテス以前の断片に連なる知の伝統も視野に収められる。したがって、近代アフォリズム文学は、本来であれば、思想・文化・社会に通底する知の連続性を記述する総合研究(例えば文化学)に積極的に貢献できるような研究題材として広く検討されてもよいはずである。しかし従来のアフォリズム研究は、個々のアフォリズムを作家の「作品」として解釈する個別研究に集中しており、アフォリズムを人間の知的営みに通底する事象として捉え直し、その芸術的・文化的な意義を考究するまでには至っていない。

2. 研究の目的

以上を背景としつつ、本研究は、アフォリズムの生成を書き手の能動性、靈感、天才性だけに還元する作家研究から一線を画して、この断片的書記の実態そのものを捉え返し、ある種の文化実践として複合的に分析・把握することを目的とした。時代は18世紀ドイツ近代に限定して、啓蒙期からロマン派の作家によるアフォリズムの生成過程を把握し、その具体相を精査することで、次のような文化事象との相関関係をも視野に収めたダイナミックな総合研究を目指した。つまり、**1)**識字率の拡大と印刷術の発展による文芸市場と読書文化の確立 **2)**それに伴う読み方、書き方、更には出版の仕方の多様化 **3)**書籍メディア文化を背景にした、学問研究(神学、哲学、古典文献学)から啓蒙教育政策への転換 **4)**これらの社会的・文化的土壌で育った初期ロマン派の世代(主に1770年代生まれ)を中心としたアフォリズムの台頭といった文化事象に考慮しつつ研究を進めた。

近代のドイツ・アフォリズム文学に関する研究は、Neumann (*Ideenparadiese*, 1976)の他は、受容美学(Fricke: *Aphorismus*, 1984)とジャンル文芸論(Spicker: *Der Aphorismus*, 1997)の各領域における部分的な分析に限られる。本研究の目標は、**1)**18世紀のアフォリズムの実践と、神学や文献学のような伝統的な学問文化および通俗的な黙読文化との関連性を調査し **2)**従来の作家研究や文芸理論的考察にとどまらない、総合的な文化研究としてのアフォリズム研究モデルを独自に構築しようとする点にある。

その際に本研究は、ドイツ語圏における「文化技術」論の研究動向に注目している。そこでの最新の議論と研究蓄積を取り込み、我が国に紹介する役割を担うことも、本研究の重要な目的のひとつである。「文化技術」という用語は、読み、書き/描き、計算に広く関係する操作と技術の総称であり(Siegert: *Cultural Techniques*, 2013)、近代の二つの大きな知のパラダイム転換に関係する、メディア・システムの総体的記述に寄与した Kittler の文化研究(*Aufschreibesysteme 1800・1900*, 1985)に由来している。本研究はこれを引き継ぎながら、手帳、原稿の筆記法、印刷紙面の体裁、言説の操作詞(表題、目次、項目)など、これまで見逃されてきた、より詳細な、**小さな文化技術**の実態解明に着手する立場をとった。

また、将来的には、近代ドイツの文化・文学に立脚しながらも、同様の質量をもつ別の時代・言語のテキスト群にも妥当する文化技術上の諸要素の発見・精緻化を企図している。本研究は、こうした大きな展望を先に見据えた研究活動の基盤構築のための、重要なスタート地点に位置付けられる。

3. 研究の方法

本研究の実施にあたり、次の三つを具体的な研究方法に設定した。つまり、制作現場で産出されるアフォリズムの文体・書法の体系的考察(資料研究)、当時の出版・書誌資料および諸作家の手稿の検証を通じた18世紀におけるアフォリズムの実態調査(実証研究)、そしてメディア史、書物史、読書史、書字史、文化技術論、編集文献学などの基礎理解および応用的な理論研究(文化研究)である。この方法に基づいて、2020年度から21年度の期間中、本研究は以下のように進められた。

2020年度

(1)断章の作家として知られるドイツ・ロマン派の文芸批評家フリードリヒ・シュレーゲルの編著「アテネウム断章集」(以下「断章集」)に焦点を当て、このアフォリズム集の特徴をメディア感性論や文化学の観点を織り交ぜて分析した。ここでは「断章集」の内在分析に終始するのではなく、上記の文化研究の立場から、シュレーゲルのテキストから彼の知覚理論を再構成し

つつ、外在的(文化的)な諸要素について検討しながら、アフォリズムの成立要因・特色を考察した。つまり本研究の目的に即して、一方で18世紀後半における読書文化の影響(例えば声の文化から文字の文化へ、音読から黙読への移行)また他方ではシュレーゲルとその同時代人たちの美術(館)体験という当時の文化背景に着目した。これにしたがって、このアフォリズム集が、受容の際の効果という点で、絵画芸術を観て回る鑑賞者の体験に類比する特質を備えていること、そしてそれが文学(文字メディア)でありながら文学とは別の芸術ジャンルとの交流の場へと作品を展開していく、シュレーゲルによる文学的实践の一例であることを論じた。

(2)資料研究として、シュレーゲルの手稿断章群にみられるアフォリズム的な筆記法の実態について、複写資料および写真版の遺稿集を活用して分析した。今回は、彼が筆記した無数のアフォリズムにしばしば伴う下線強調に焦点を当て、これを本研究における「小さな文化技術」の枠組みで多面的に検討した。具体的には、文中の固有名詞や作品名に引かれる場合(書籍出版文化における一般的な文化技術に属する場合)と、専門語・術語に対して恣意的に引かれている特殊な場合(シュレーゲルの書記が「伝統」から逸脱し「革新」へと向かう場合)とに区分した。後者についてはシュレーゲルのアフォリズム的な思考過程に特有の下線操作として掘り下げて考察した。

(3)シュレーゲルのアフォリズムを足掛かりにしつつ、啓蒙期の作家として科学者リヒテンベルク、歴史家ヘルダー、劇作家レッシング、ロマン派の作家としては詩人ノヴァーリスのアフォリズム・テキストを分析対象に定めて、それぞれの一次文献(批判版全集)を中心に資料を蒐集し、次なる資料研究のための環境を整えた。その際に同時代の作家として自然科学者A・フンボルトや詩人ヘルダーリンらの草稿資料も、複写による書籍が入手できたため、調査対象に加えることにした。彼らはいわゆるアフォリズム作家には分類されないが、18世紀ドイツの書記の技術の内実を、その成立現場(手稿)にまで差し戻して探る上では重要な事例であると判断した。

2021年度

(4)実証研究と文化研究にかかわる問題圏として、アフォリズム作家の遺稿の編集・出版の文化史という観点から研究を進めた。ここでもロマン派のシュレーゲルに焦点を当て、彼のアフォリズム群(遺稿)の編纂に関わった歴代の編集者の出版意図や編集方針をまとめながら、各版の活字体裁の変遷から受容史に至るまで多角的に検討した。これを通じて、そもそも近代アフォリズムとは遺稿として作家の死後に発見され、それを第三者が編集することではじめて受容・研究可能なものになったケースが非常に多いのではないかと、という新たな問いが生じた。その意味においても、遺稿・草稿編集というプロセスがアフォリズムの成立にとって極めて重大であることが改めて確認できた。

(5)前年度に蒐集した文献に基づいて、啓蒙期からロマン派に至る作家の資料研究を実施した。そのうち、一次文献や二次文献において手稿の複写が参照可能であった作家、例えばレッシング、A・フンボルト、F・シュレーゲル、ヘルダーリンの手稿資料を中心に調査した。彼らの用いていた原稿ないしノートの紙面は、欄外の余白が紙幅の半分近くを占めており、欄外書き込み(注釈・批判)が円滑に行えるという筆記上の特徴が見いだされた。この「二段構成型ノート」の存在は本研究にとって重要であり、現時点では、啓蒙期のレッシングとフンボルト、ロマン派のシュレーゲルそれぞれの手稿において同様の特徴を確認できている(ヘルダーリンの詩作草稿に関してはこの限りではないと考えられる)。これにしたがって本研究では、「二段構成型ノート」が、18世紀の学者階層に典型的な「文化技術」であるという仮説を立てるに至った。

(6)こうしたノート紙面の余白で実践される注釈・批判が、アフォリズムの産出と密接に関連することを、ロマン派のシュレーゲルのノートを手掛かりにして例証した。彼のアフォリズム的な書記実践は、下線強調に関しては「革新」の側にも関係していた。しかしノートの使い方という「小さな文化技術」に目を向けると、彼によるアフォリズムの産出は、初期啓蒙期のいわゆる「学者共和国」あるいは古典文献学に通ずる学者文化の「伝統」とも密接に結びついているといえる。

4. 研究成果

本研究の実施期間においては、単著論文3点(うち2点はドイツ語による)、口頭発表3点(うち国際学会と招待講演が1点ずつ)を主たる研究成果として発表し、また、本研究の関心に付随するかたちで実現した共著論文も1点発表できた。以下にその詳細を記す。

上記(1)の、ロマン派のアフォリズム作品「断章集」に関するメディア感性論的分析の成果は、査読付き論文「流れる 絵画芸術としての「断章集」 フリードリヒ・シュレーゲルにおける遊戯の文学的实践」として日本アイヒェンドルフ協会会報『あうろ〜ら』(37号, 2020年)に発表した。上記(2)のシュレーゲルの手稿に関する資料研究については、国際論集への寄稿に合わせる形で、ドイツ語で論文を執筆・発表することができた。すなわち、ドイツ・ミュンヘンの iudicium 社より出版された国際論集『Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz』(2020)に「„Rhapsodisches“ Verfahren in der „Masse von Fragmenten“ bei Friedrich Schlegel. Zur Theorie und Praxis der Schreibtechnik um 1800」(日本語: フリードリヒ・シュレーゲルの「断章群」における「吟唱される詩のように」書く手法 1800年前後における書記技術の理論と実践)という論文タイトルで成果を発表した。

上記(3)および(5)に関しては、筑波大学 TEACH プログラム主催の講演会(2022年1月,

オンライン)に招待され、成果報告の機会を得た。「創作ノートを覗き込む ドイツ啓蒙期からロマン派の知識人を中心に」というタイトルで行ったこの口頭発表は、文学部や社会学部の学部生、韓国からの留学生が聴講する比較的開かれたものであったため、本研究のアウトリーチ活動としての役割も果たした。熱心な学生たちとの活発な質疑・意見交換の場になり、想像以上に収獲の多い講演となった。

上記(4)の成果については、春季日本独文学会の編集文献学をテーマにしたシンポジウム「Edition から Dokumentation、そしてその先へ」(2021年5月、オンライン)での口頭発表(「フリードリヒ・シュレーゲルの遺稿断章群とその編集・出版の歴史 ヴィンディッシュマン、J・ケルナーから E・ペラーヘ」)を、さらには国際ゲルマニスト学会 IVG(2021年8月、パレルモ/オンライン)でドイツ語による個人研究発表(Editionsgeschichtliche Untersuchung am Beispiel von Fragmenten und Notizen bei Friedrich Schlegel: Zu den technisch-materiellen Bedingungen der Interpretation)を実施した。特にこれらの成果発表を通じて、「編集文献学(Editionsphilologie)」という新たな知見から、アフォリズム(例えば遺稿)とその編集・出版という問題圏に本研究を接続するためのさまざまな示唆を得ることができた。この着眼点からのアフォリズムの考察は、本研究開始当初には十分に想定されていなかったが、今後領域の異なる研究(者)と本研究が連携していくためには不可欠でありかつ有益なプロセスであったと考えている。

なかでもドイツ語圏の大規模な国際学会 IVG にて本研究を発信できた意義は大きく、国内にとどまらない国際的に高い水準から研究成果を問う機会が得られたことは特筆しておきたい。同学会での成果報告としてペーター・ラング社の国際論集への論文掲載が決まっている(2022年度刊行予定)。また、日本独文学会でのシンポジウムに登壇したメンバーで、カフカの草稿(複写資料)に対する文献考証に取り組み、その成果を共著論文として『成城文藝』(257号、2021年)に発表した。18世紀に焦点を当てた本研究にとって、19世紀におけるアフォリズム作家としても括りうるカフカを事例にした資料研究の経験を積む機会に恵まれたことは、今後の発展的研究に繋げるうえでも極めて重要な経験となった。

上記(6)は、シュレーゲルの文献学的な書記実践に関する成果を「Tradition und Innovation in der philologischen Schreibtechnik Friedrich Schlegels」(日本語:伝統と革新 フリードリヒ・シュレーゲルの文献学的書記技術)というタイトルで、国際論集『Study of the 19th Century Scholarship』(13号、2022年)にドイツ語で報告した。

以上の成果報告に加えて、最後に、ドイツへの海外渡航を通じた実地調査が叶わなかった事情に関して補足しておく。

2020年春以降のコロナウィルス感染症の影響により、本研究の中核をなす上記「実証研究」に係る、ドイツのベルリン、トリーア等の各図書館への資料調査を、本研究期間中に実施することができなかった。この点に関しては、当初の計画を大幅に変更することを余儀なくされた。しかしながら、その際に旅費に充てられるはずだった予算を使って、追加で最新の遺稿集・カタログ・書誌を収集することで、可能な限りでの現地調査の代替措置を試みた。結果として、これから研究を本格的に始動するために必要な基礎文献資料を多数充填できただけでなく、上記(3)や(5)に代表されるような、効果的な資料研究にも繋げることができた。これらの成果は、「研究スタート支援」という当科研費の位置づけに鑑みても、ドイツでの短・中期的な調査を補って余りあるものとして肯定的に捉えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 二藤拓人	4. 巻 37
2. 論文標題 流れる 絵画芸術としての「断章集」 フリードリヒ・シュレーゲルにおける遊戯の文学的实践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本アイヒェンドルフ協会会報『あうる～ら』	6. 最初と最後の頁 44-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 NITO, Takuto	4. 巻 -
2. 論文標題 "Rhapsodisches" Verfahren in der "Masse von Fragmenten" bei Friedrich Schlegel. Zur Theorie und Praxis der Schreibtechnik um 1800	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz	6. 最初と最後の頁 620-628
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 NITO, Takuto	4. 巻 13
2. 論文標題 Tradition oder Innovation in der philologischen Schreibtechnik Friedrich Schlegels	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Study of the 19th Century Scholarship	6. 最初と最後の頁 95-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 明星聖子, 二藤拓人, 森林駿介	4. 巻 257
2. 論文標題 「逮捕」と「終わり」をどう並べるか カフカ『審判/訴訟』の編集・翻訳プロジェクト	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 成城文藝	6. 最初と最後の頁 90-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 二藤拓人
2. 発表標題 フリードリヒ・シュレーゲルの遺稿断章群とその編集・出版の歴史 ヴィンディッシュマン、J・ケルナーからE・ペラーへ
3. 学会等名 日本独文学会2021年春季研究発表会シンポジウム：EditionからDokumentation、そしてその先へ（オンライン）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 NITO, Takuto
2. 発表標題 Editionsgeschichtliche Untersuchung am Beispiel von Fragmenten und Notizen bei Friedrich Schlegel: Zu den technisch-materiellen Bedingungen der Interpretation
3. 学会等名 XIV. Kongress der Internationalen Vereinigung fuer Germanistik (パレルモ大学・オンライン) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 二藤拓人
2. 発表標題 創作ノートを覗き込む ドイツ啓蒙期からロマン派の知識人を中心に
3. 学会等名 筑波大学 TEACHプログラム主催講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Muroi, Yoshiyuki (Hrsg.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 iudicium	5. 総ページ数 1012
3. 書名 Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------